京都帝國大學所藏ウルク國王シインガシイドの粘土板碑文の解讀と解說

文學士　中原與茂九郎

一

濱田教授が滯英中、オックスフォド大學の故アッスリア學講師 C. J. Ball 博士の蒐集になるニップール Nippur 出土の楔形粘土板文書 Cuneiform clay tablets の一部を讓受將來されしもの五十六個とSayce 博士、Ball 博士、故内田博士等の寄贈になる四個とを合した六十個のタブレットが京都大學文學部陳列館に所藏されてゐるが、其等のタブレットは夫々シュメール語、ハッチ語、Khatti, Hittite アッスリア語 Assyrian の楔形文字 Cuneiform script, Keilschrift で書かれてゐる。其中ニップール出土のタブレットの用語はシュメール語 lishan shumeri, Sumerian language であり、其文書の殆んど全部は Dungi, Bur-sin, Gimil-sin 等 Ur 第三王朝 (2298-2180B.C.) 時代のもので、其内容は神殿の收入、費用の記錄、穀物家畜等の受取證文、或は「國王の名に於て誓つた」"mu lugal-bi in-pad" 契約證文等である。是等の記錄證文類は古代バビロニアに於ける經濟狀態を知る有力な資料となるものである。しかし今私は是等の記錄證文の研究には觸れずに、一個のタブレットの——濱田教授將來品の一つであつて、極めて僅かではあるが初期バビロニア史に關與した南部バビロニアのシュメール地方に在る都市國家ウルク Uruk 國王シイ

ンガシイド（Ca. 1800B.C.）の粘土板碑文 The Clay tablet Inscription of Sin-gashid の——解讀と解說とを試みたい。此シュメール語碑文の解讀は私が昨夏休暇中、京大文學部考古學研究室にて試みたものを、タブレットの寫眞と共に、濱田教授の御盡力により、英國エヂンバラアなる A. H. Sayce 博士の許に送つて、其是非を乞ひしものである。

Rev. Archibald Henry Sayce 博士は人も知るアッスリア學の世界的權威である。一八四五年九月二五日、Shirehampton に生誕された。長じてオックスフォド大學に入り、Queen's College にて Max Müller の薫陶をうけつゝある間に、すでに新興科學、アッスリア學に興味を有ち、その研究に從つて居られた。年三十歳にしてオックスフォドの比較言語學の Deputy Professor に任ぜられたが、一八九一年アッスリア學講座が新設さるや其教授に轉ぜられ、爾來三十年間博物館派に對して大學派の頭領として斯學の興隆に盡力された。一九一九年、道を後進 S Langdon に讓られたが今や再びアッスリア學の Emeritus Professor としてクインス・カレッヂの教壇に立つてをられる。セイス博士は明治四十五年（一九一二）と大正六年（一九一七）と前後二回、訪日され、殊に第二回の訪日の際には京都大學に於て "Sumerian script and language" の題下に連續講演されたことは衆知の事實である。

セイス博士より濱田教授への御返信によつて、私の解讀は一個所を除き—それも誤りではなく、他にも讀方があるといふ教示—正しかつたことが明となつた。今解讀と解說にとりかゝる前にシュメール人に就いて、又粘土板文書についても一言せねばならぬ。

シュメール人とはバビロニア先住民族で西紀前五千年頃より二千年頃にかけて、主として、南部バビロニアのチグリス・ユウフラテース兩河流域

地方に榮えた民族であつて、高級なる古代バビロニア文明の創造者である。楔形文字は此民族の發明にかゝるものである。此民族は自ら Kingi, or Kengi と稱して居つた。後れてバビロニアの地に移住してきたセム族 Semites が此先住民をシュメール Shumer と呼び自らをアッカード Akkadu 又はアガデ Agade と稱したことより今日のシュメールなる語が起つたのである。卽ちシュメールとは義字 KI-EN-GI「蘆原の主」のセム風の讀み方である。しからばシュメール人は何人種に屬したかといふ人種所屬問題に就いては今日のところ定說はないが非セム民族 Non-Semites なることには諸學者の說一致してゐる。（シュメール人の人種所屬、原住地等の問題に就いては、昭和二年一月號「歷史と地理」所載の拙稿「バビロニア先住民族シュメール人問題」を參照されたし。）

バビロニアに於ては紙の代りに粘土を凝固さしたもの卽ち粘土板 clay tablet, Tontafel が用ひられた。バビロニアの沖積地には良質の粘土が豐富であつた。極く古くは石板 stone tablet が使用されたが、粘土板が始めて書用に供せられ出したのは Langdon 敎授に從へばラガシュ Lagash (Shirpurla, 今日の Tello.) 國王ウルニイナ Ur-nina (Ca. 3000 B.C.) 時代より約一世紀前からである。(一) 紙が使用されたかどうかといふに、使用されたといふ說もあるが、使用されなかつたといふ說が有力のようである。何分時代が古いのと氣候がエジプトとは異つてゐるので、資料が殘つてゐない關係上決定的な斷案を下すことは困難である。シュメール語で粘土板のことを dub といひ、アッスリア語では、duppu といふ。又シュメール語で學者を dub-shar といふが、意味は「粘土板に書く人」である。粘土板文書には燒かれたものと燒かれざるものとあるが、前者は書後火にて燒かれたもので、後者は太陽にて乾かされたものである。保存の永續を目的とするものは主として燒かれたようである。dub なる語

は一般に燒かれた粘土板の義に用ひられた。(2) 書き方は柔い粘土板に蘆製、骨製或は金屬製の尖筆 stylus をもつてイムプレスしたのである。そのため書かれた文字は楔形となつた。楔形文字 Cuneiform script, Keilschrift の名の生ずる所以である。「楔形」なる文字の最も早く見ゆる文獻は一七〇〇年にオックスフォードにて出版された T. Hyde の「古代ペルシヤ宗教史」である。(3) タブレットの大さは種々あつて一定しない。本題目のシインガシイドのタブレットは其大さ横一寸九分、縱二寸五分ある。（京大所藏中最大のものは横二寸五分、縱五寸二分、最小のものは横一寸、縱一寸五分あり。）

(1) The Cambridge Ancient History, Cambridge 1923. vol. I. p. 376.

(2) S. Langdon, A Sumerian Grammar and Chrestomathy. Paris 1911. p. 211.

(3) A. H. Sayce, A Primer of Assyriology. Rev. ed. London 1925. p. 23. Hyde, Historia Religionis veterum Persarum. Oxford 1700. に ductuli pyramidales seu cuneiformes. とある。

二

次に解讀解說しよう。

翻　字。

Obverse :

1, (dingir) Sin-ga-shi-id

2, Umun lig (or kal)-ga

3, lugal unug-(ki) -ga

4, lugal am-na-nu-um

5, u-a e-an-na

6, ud e-an-na

Reverse :

1, mu-dū (or rū)-a

2, e-gal

3, nam-lugal-la-ka-ni

4, mu-dū (or rū)-a

右の翻譯

表面

(一) シインガシイド

(二) 偉大の主

(三) ウルクの國王

(四) アムナヌウム國王

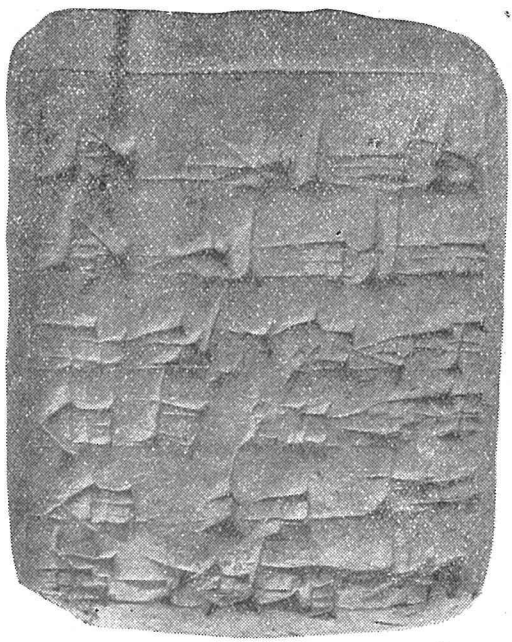
(五) エアンナの保護者

(六) エアンナを

裏面

(一) 建立せし日に

(表面)



(裏面)

(二) 大いなる家を
(三) 彼の王國の
(四) 造營せり

解　說

表面第一行目の第一字 dingir は本來の義は「神」であるが、固有名詞の前に置かれる場合は所屬決定詞 determinative の作用をなすもので普通には讀まないとされてゐる。dingir は月神 Sin を示す determinative である。シインガシイド王の名は月神 Sin と gashid「天の河」との複合したものである。dingir を an と讀むときは「天」「空」の意となる。三行目の ki は同樣に「國」「都市」の determinative である。表面二行目と三行目との最後の語 ga 五行目六行目の na, 裏面三行目の la-ka はともに第二格助詞 genetive suffix である。第二格助詞には是等の外に ge, ka, la, ra, a 等がある。日本語の「の」「が」や今日の「まなじり」「みなものと」、奈良朝時代の「美奈曾己」（萬葉集廿）「奴那登」（古事記上）多那須衞（書紀一）などの「な」に當るものである。表面二行目の umun は nitah とも讀み「君主」「英雄」の意、lig 又は kal は「偉い」「强い」「大きい」の意。五行目の u-a は「食物を與ふる者」「供物を捧げるもの」「保護者」の意、六行目の ud は名詞としては「太陽」「日」「光輝」を意味するが、こゝでは接續詞として「……の時」「……の後」「……の日に」と譯せばよい。裏面三行目の nam-lugal の nam は抽象名詞を作る助詞、lugal は「大いなる人」卽ち「國王」である。nam-lugal となれば「王國」「君主權」「君臨」「君位」となる。裏面一行目、四行目の mu-dū or rū は「建立す」「造營す」の意、dū or rū については後に述べる。

表面の第二行より第五行まではシインガシイドの稱號である。第六行及び裏面全部はシインガシイドの事業の記錄である。卽ちシインガシイドが

エアンナ神殿建立後にその王國の宮殿を造營した記錄である。

シインガシイドはバビロニア第一王朝(2049-1750 B.C.)末期頃、凡そ一八〇〇年頃にウルクに君臨した國王であつた。(1) シインガシイドはその政治的事業としてはアムナヌウム Amnanum 卽ちペルシヤ灣に近きエラム・バビロニア國境山地の一地方を領有した。彼は又三大土木事業を起し、エアンナ E-anna エカンカル E-kankal の二神殿と宮殿とを建立造營した。古代バビロニアに於て王者の最も卓れた事業は運河治水の事業と神殿宮殿の造營とであつた。法典編纂が一大文化事業であつたことは云ふまでもない。

ウルク Uruk は Unug の訛つたものである。ラングドン教授に從へば、Unug は Unu=dwelling とエラム=シュメール語の方位を示す接尾辭 vocative ending の ak との複合したものらしい。(2) セム=バビロニア人が訛つてウルクと稱したのである。ウルクは舊約書創世紀に出てくる(十ノ十)エレク Erech であり、ニップール Nippur エリヅ Eridu と共に古代バビロニアに於ける宗教の三大中心都市であつた。現今のワルカ Warka が其都址である。其位地は南部バビロニアに於て、チグリス=ユウフラテース兩河が最も相距たる處に、ユウフラテースの東方約四哩の地點に在る。舊河道よりいへばその西岸に當る。されば今日のユウフラテースは舊河道より四哩西にずつたわけである。ウルクには古より傳說的王朝を加へて六個の王朝が斷續的ではあるが興亡してゐる。バビロニアに於ける一大叙事詩卽ち Gilgamesh Epic の主人公として歌はれてゐる有力なギルガメシュの君臨した傳說的第一王朝は凡そ西紀前五千年頃の建國であると Poebel によつて、疑問的ではあるが推定されてゐる。(3) バビロニア第一王朝末期に君臨し

たシインガシイドの屬する王朝は第六王朝であつた。Anam, Sin-gashid, Sin-gimil, Arad-shagshag の四王が此王朝に屬した國王であつた。(4) ウルクの都址は周圍六哩の城壁で取圍まれ、其面積は千百エーカーの圓形面積である。城壁内には三個の大塚と無數の小塚とが散在してゐるが、そのうち都址の東部にある大塚の上にはエアンナ神殿の遺址が立つてゐる。

アムナヌウム Amnanum は Amnanu-ki とも書かれた。後世アッスリア帝國の帝王 Assurbanipal (669-626B.C.) の兄弟 Samas-Sumukin は其稱號を「アムナヌ國王、バビロン國王」shar Am-na-nu-ki shar Babili-ki と稱した。アッスリア時代のアムナヌは F. Hommel 教授の推定してゐる如く、バビロニア南部の海岸地方よりアラビア東海岸地方一帶の名稱であらうが、(5) シインガシイド時代のアムナヌウムはそれ程廣き地方では有り得ない。何んとなれば、シインガシイド時代にはバビロニア南部の海岸地方よりアラビアの東部地方にはバビロニア第一王朝の衰弱に乘じて所謂「海國」mātāmti, Sea-Country, Meerland と稱するセム族の王朝が建國してゐる。此海國はハッムラビ王の子サムスイルナ Samsu-iluna (1904-1867B.C.) の御代に建國し、約三百年の生命を保つてゐる。さればシインガシイド時代のアムナヌウムはホムメル教授が先著バビロニア＝アッスリア史にて推定したペルシャ灣に近きエラム＝バビロニア國境山地の一地方とするを妥當と思ふ。(6)

エアンナ E-anna は「天の家」又は「アヌ Anu の家」の意であつてウルクの守護神、天界の支配神、諸神の父なるアヌ Anu と一大處女神インニニ Innini (or Nanna) の共祭されてゐる神殿である。エアンナ神殿はウルクの東部に在つて、面積二百平方呎ある大寺塔と共に四隅を東西南北に向けた

方形の一大プラットフォムの西角に立つてゐる。エアンナ神殿の最初の建立者は何人であるか判らないが、古き建立者としてウル第三王朝第二代の國王ヅンギ Dungi (Ca. 2280–2223 B. C.)を擧げることが出來る。[7] シインガシイドの建立は再建である。一八五四年此地發掘の際、エアンナ神殿の文書館より多くの粘土板に書かれた宗教文書が發見された。其文書の中には西紀前七十年といふ新時代のものもあつた。[8] ウルクの生命はかく永く、ギルガメシュ時代より羅馬共和政末期頃まで約五千年の間斷續的ではあつたが脈搏つたのであつた。

裏面二行目の e-gal, egal は「大きい家」の意で神殿にも用ひられるが、一般には宮殿に用ひられる語である。 e-gal nam-lugal-la-ka-ni は「彼の王國の宮殿」と譯せばよい。大英博物館所藏のシインガシイドの煉瓦碑文 Brick Inscription にもシインガシイドは彼の王國の e-gal (宮殿)を造營せり」と記銘されてゐる。[9] 京大所藏のシインガシイドのタブレットには「エアンナを建立した後に彼の王國の e-gal を造營した」とあるので此 e-gal は大英博物館所藏の他の煉瓦碑文に[10]

……9. ud e-an-na 10. mu-dū-a 11. e-kankal
12. e-ki-dur 13. say-ḫul-la-ka-ne 14. mu-ne-en-dū

「……エアンナを建立せし後に、エカンカル E-kankal 彼等の ne 心の喜ぶ樓家 ekidur を彼等のために ne-en 建立した。」

とあるエカンカル神殿と何等かの關係があるのではなからうかとも考へられるのである。(此碑文に「彼等」とあるはシインガシイドの神 Lugalturda と母 Ningul のことであるが、これは碑文の初めに記銘されてゐるのをこゝでは略したのである。)尙又エカンカルのカンカルと讀んだ二個の義字 KI-KAL は「大きい場所」の義である。エアンナ神殿建立後とあるよりして、京大所藏の碑文のエ

ガル「大きい家」を宮殿の意にとらず神殿にとつてエカンカル神殿を指したものと解して解せないことはない。

しかしウルクの都址には三個の大いなる塚があり、その一つが既に發掘されたエアンナ神殿なれば、未發掘の他の二個の大塚を「エカンカル神殿」と「王國の宮殿」との址と想像出來ないこともない。しかし、これは想像であつて愈々のことは將來の發掘に俟たねば判らない。（因に大英博物館所藏のシインガシイドの碑文に就いては本年四月號「歷史と地理」の拙稿「シインガシイドの物價碑文に就いて」を參照ありたし。）

(1) The Cambridge Ancient History vol. I. p. 562. 尙シインガシイドの年代に就いては前揭「ウルク國王シインガシイドの物價碑文」を參照。

(2) C. A. H. vol. I. p. 396

(3) ibid. p. 665

(4) ibid. p. 562

(5) F. Hommel, Ethnologie und Geographie des Alten Orients, München 1926. s. 263.

(6) Oncken, Allgemeine Geschichte 中の第二卷、Hommel, Geschichte Babyloniens und Assyriens, Berlin 1885. s. 342.

(7) Cuneiform Texts from Babylonian Tablets in the British Museum, London 1995. Part XXI, plate 11, No. 90897.

(8) C. A. H. vol. I. p. 397.

(9) Cuneiform Texts, plate 12, No. 90268.

(10) ibid. plate 13, No. 91081. lines 9-14.

三

本稿を丁へるに當つてセイス博士の懇篤なる御敎示に就いて述べねばならぬ。同博士は濱田先生への御返信の外に、私宛に本年一月エジプト旅行先よりシュメール語研究法に就いて懇篤なる數々の御敎示を賜はつた。あれといひ、これといひ、セイス老先生の御親切に對しては涙ぐましい感謝を感じてゐる次第である。數々の御敎示のうち、こゝでは解讀に關係あるものゝみを述べるにとゞめたい。

裏面一行目の第二字と三行目最後の文字とを私は dū と讀んだ。是に對して、セイス先生は、此義字はシュメール語にて二樣に讀まれてゐる。それは dū の他に rū と讀まれ、共に「作る」「造る」「建つ」の義である。而して如何なる場合に dū と讀まれ、或は rū と讀まるべきか我々は其特殊な場合の讀方を知らない。各人まち〳〵に讀んでゐるとの敎示を賜はつた。

セイス先生は、又シュメール語の動詞問題は單に歐洲の學界に於て未解決であるのみならず、既に遠くセム人も失敗してゐたといふ事を敎示下さつた。

……I hope he will solve at last the problem of the Sumerian verb which we in Europe have failed to do (as the Semitic Assyrians failed to do also).

シュメール＝アッカード地方に居住したシュメール、セム兩民族語は、全く別個の語系に屬する言語である。セム族であるバビロニア人、アッスリア人の使用文字卽ち楔形文字はシュメール人の發明したもので、彼等はシュメール人より借用したものであつた。シュメール語は所謂膠着語 agg.utinative language である。シュメール語に關することは他日述べたいが、――（前揭「バビロニア先住民族シュメール人問題に就いて」のうちにも少しばかり觸れてゐるから參照されたし。）――要するに現今歐米に於けるシュメール語研究は其基礎をアッスリア時代の學者の研究に置いてゐるのである。卽ちセム人の理解を通して行はれてゐるのである。それはニネベ Nineveh にあつたアッスリア帝王 Assurbanipal (669–626 B.C.) の帝室文書館より發掘された多數の粘土板文書に、アッスリア學者の作つたシュメール語の文法、辭書、讀本等があるのを基礎としてゐるのである。是等を最初に利用した人はフランスのアッスリア學者 Jules Oppert (1825–1905) であつた。(1) ペルシャ帝國のダリウス二世 Darius がペ

ルシャ語、バビロニア語、スシアナ語（新エラム語）Persian, Babylonian, Susian (Neo-Elamitic) の三國語――いづれも楔形文字でかゝる――で碑銘した所謂ベヒスツン碑文 The Inscription of Behistun を解讀して――ペルシャ文の解讀は一八三七年、――楔形碑文の眞の意味の解讀を可能ならしめた H. C. Rawlinson もシュメール語の存在を指摘し、これに「アッカード語」"Accadian" なる名稱を與へてをつたが、シュメール語の組織的研究を始めた最初の人は Oppert であつた（一八五九年）。而して最初にシュメール文法を略述した人はセイス博士其人であり、それは一八七〇年のことであつた。(2) セイス先生は其著 Reminiscences の中で當時のことを次の如く回想してをられる。(3) 「私はクリスマス休暇（筆者曰一八六九年）をこれまで從事してきたバビロニアの原始シュメール語の最初の文法のスケッチを書き上げることゝ、シュメール語の言語學的位置と其聲音學とを決定し、且ついくらかの小碑文を解讀することに用ひた。此ベーバーのテキストは西紀前二千三百年頃に「カルデアのウル」を首都として君臨したヅンギ Dungi の名のある印章の碑銘であつた。故に私は題目を "On an Accadian Seal" とした。それはシュメール語が其頃、アッカード語と呼ばれてゐたからである。私は是を當時 Aldis Wright が編輯者であつた Journal of Philology に投稿した。しばらくして Wright は私の同僚 brother-Fellow（筆者曰、クインズ・カレッヂの）Richard Robinson に、其ベーバーと又私に就いて彼の知れるところを問ふた。ロビンソンは答へた。「印刷なさいますな。セイスは言語學者で、博物學については何んの知識もないものです。」彼はベーバーの題目を Arcadia に恐らく產する海豹 Seal だと考へたのであつた。He thought the subject of the paper was an am-

phibian supposed to be found in Arcadia. セイス先生の最初のシュメール文法はかく笑話的エピソードのうちに印刷されたのであつた。爾來、Oppert, Sayce, Lenormant, Haupt, Hommel, Amiaud, Thureau-Dangin, Langdon 其他學者の研究努力によつてシュメールの言語、其他一般文化の知識は著しく進歩し、今や其學的價値も認識されてSumerology としてAssyriology より派生するに至つた。

セイス博士に從へば、既に遠くアッスリア人が失敗し、歐洲人も亦失敗してゐる難解のシュメール動詞問題解決に多分の可能性をもつものはシュメール語と其文法構造に於て類似言語を有つ人種民族に屬する人々である。我々日本人が其資格を具した一民族であるとはセイス博士が再度の訪日の際、京都大學の講演に於て述べられしところ、又此度の書簡にも言及してをらるゝところである

As I used to tell you, it is only those whose native language is like Japanese in Structure and grammar who will be able to decipher Sumerian properly."

"The solution of the difficulties connected with the grammar of Sumerian, more especially of the verb, will be much easier for one whose native language is Japanese than for a European."

乍末筆、御多忙中にもかゝはらず早速にセイス先生に紹介の勞をお取り下さいました恩師濱田先生に感謝の意を捧げて擱筆す。(一九二七・五・八改稿)

(1) Sayce, A Primer of Assyriology. p. 36

(2) ibid. p. 36.

(3) Sayce, Reminiscences. London 1923. p.p. 54-5.